

## 「氣功」と「ホメオパシー」に挑戦

私達が日頃慣れ親しんでいる医療は、いわゆる「西洋医学」であるが、それ以外の医療は総括して「代替医療」と呼ばれている。「だいたいりょう」と読む。がんなど死を意識する病気になつた人の多くは、代替医療と呼ばれるものにも興味を示す。例えば、身近なところでは「健康食品・サプリメント」がそうだ。薬事法で制限されていなかったため、「効果がある」「がんが消える」と謳うことはできないが、法の及ばないネットの世界ではがんが治つたという体験を基にこの種のものがかなり普及している。

口から入れるものだけではなく、氣功やマッサージ、祈祷、ホメオパシーなど、とにかく西洋医学以外の医療（と呼んでいいかどうかわからないが）にすがる人は多いし、その気持ちも充分理解できる。

代替医療に対する日本の理解は、はつきり言つて遅れている。日本は江戸時代までは大陸から伝わった中国医学が中心であつたが、明治に入り西洋文化を取り入れる過程のなかで、当時世界のトップにあつたドイツ医学を導入した。途端に、それまでの医学を実質否定する動きが急速に広がり、西洋医学以外の医学は「科学的ではない」との理由で世間の片隅に追いやられた格好になつていった。しかし、からだにメスを入れたり、副作用の強い薬を飲んだり、いわば病気を敵とみなす西洋医学ではなく、自身の免疫力を上げることを主な目的とする代替医療への関心は近年高まりつつある。例えば、アメリカでは代替医療の効果を検証する研究に対し、多大な予算を計上しているし、イギリスでは祈祷や手かざし療法は一部保険が認められている。

「リストベット・U」はペンネームです

リストベット・U

# 本をつなぐ 6

愛知学院大学名誉教授

林董一

## 「風紋」と私の嬉しい関係

私が以前、「新修名古屋市史」の編集でお世話をなつた、元名古屋市市政資料館副館長鞍貫正法氏から、さわやかな装丁の美本をいたいた。題して、「風紋」。平成二十二年六月に急逝された、奥様妙子様の遺句集で、一周忌に合わせて、墓標として上梓されたとか。

じつは、私は俳句に暗く、句自体の感想は能力をこえる。ここでは、巻末の、鞍貫氏の筆による、「あとがきに代えて」の一言したい。

かつて、氏は私に「独立した書意を持つのが夢」と洩らされたことが。今、その意味が理解できた。行政の達人のイメージに基づいた医療である。

治療というのは、「効くんには効く」「効かない人に効かない」ものだと思っている。これは何も代替医療に限らず、西洋医学においても同じである。最近は、遺伝子学の進歩で、あらかじめ投与しようとする化学生薬が効くタイプか否かを調べてから治療がスタートすることも増えてはきたが、まだそれほど精度が高いとはいえない。人の命や寿命についてはわかっていないことのほうが多く、「治る」という確実な保障は誰にもない。

そんなこんなで、最初の手術の後は、從来どおりに仕事を続け、リンパマッサージを欠かさず、氣功などにも親しみ、うまく病気と付き合つていこうとそれなりに努力をしてきた。……しかし、再発を告知されると、その時は思いがけず早く来た。

「同じ思いをしているのは自分だけではなかつたのだ」と氣づけば、次の一歩を踏み出すことができます。東日本大震災後も、そんな新しいつながりがたくさん生まれているはずです。これからも、ふつうの人の思いをつなぐ本を、こつこつとつくつていこうと思っています。（山）



◆風紋 鞍貫妙子遺句集  
◆著者 鞍貫妙子  
◆定価：1575円  
◆発行：ゆいばおと  
◆ISBN978-4-9902708-9-6

一ジからは想像できない、豊かな才能と並ぶならぬ筆力にめぐまれた、颯爽たる文人の姿が、そこに。夫人の俳人としての御成長ぶり、御他界前後の緊迫した空氣、御生前のエピソード。格調高い文章が、馥郁たる人生行路を際立たせる。私事にわたるが、私も氏より四か月前、糟糠の妻をなくした。なにかの刺激で、突如、愛別離苦の業火が心奥に燃え広がることも。苦悶の中で、氏の哀愁あふれる寸言を想起する。「妻の死後、長い間、妻はどこへ行つてしまつたのかと思わぬ日はなかつた」。そうか、泣くのは自分だけではないのだ。セーフティネットの力を借りて、諦念の涼風が体内をそよぎはじめた。生への勇気が、戻つた。

## ▲「本をつなぐ」原稿募集中！

その本を知ったきっかけを入れて、おすすめのコメントを600字程度でまとめ、有限会社ゆいばおと（表面参照）までお送りください（メール、ファクシミリ、郵便で受け付けます）。採用の方には記念品も準備しています。

**編集後記**

今年のはじめ、亡くなられた奥様の遺句集をつくるお手伝いがはじまりました。「あとがきに代えて」を読むたびに目がしらを熱くし、六月には「風紋 鞍貫妙子遺句集」が完成しました。その後、同じ思いの林董一先生が、小紙「本をつなぐ」欄に寄稿してくださいました。そして、林董一先生の「妻恋の詩」誕生を待つ楽しみが生まれました。

人は大きな悲しみに出合つたとき、同じ思いをしているのは自分だけではなかつたのだ」と氣づけば、次の一歩を踏み出すことができます。東日本大震災後も、そんな新しいつながりがたくさん生まれているはずです。これからも、ふつうの人の思いをつなぐ本を、こつこつとつくつていこうと思っています。（山）

**お知らせ**

ゆいばおとでは、みなさまの作品や経験を本にするお手伝いもしています。随筆集、紀行文、自分史、歌集、句集、写真集、絵本などをあってみたいとお考えの方は、お気軽にお問い合わせください。

編集・出版 ゆいばおと  
TEL 052-955-8046  
Eメール yuiyama107@wine.ocn.ne.jp

**「ゆいばおと」バックナンバー**

創刊号インタビュー／横幕真紀さん（『ずっとそばにいるよ』著者）  
「ありがとう」を伝えたい！  
2号 インタビュー／齊藤とも子さん（『きのこ雲の下から、明日へ』著者）  
「きのこ会」を次世代につなぐ  
3号 インタビュー／堂本暁子さん（『生物多様性』著者）  
「COP10」の成果を未来につなぐ  
4号 インタビュー／茶畠和也さん（イラストレーター）  
そろそろ進むことにブレーキをかけないといけない  
5号 インタビュー／にわぜんきゅうさん＆久子さん（『しあわせしあわせ著者』）  
二十年という年月でのものごとをみれば、物語がある

\*ご希望の方には送ります。無料です。